

河川環境とサケの利用について

ひえだ・かずとし
1948年、福岡県生まれ。映一誌
1982年東京水産大学卒業。映画
会社勤務後1985年フジテレビ
ランスカメラマン。学習は各
等の動物写真撮影。現在、地
八雲町に在住し、道内各
の淡水魚を撮影している。

稗 田 一 俊

本文のねらい・要点

先を読めなかったサケのふ化事業の失策が幸いして、サケが川に上り自然産卵が可能となった。サケに河川の仕組みを学び、自然界でのサケの役割を考えれば、立派な環境教育となり、河川蘇生への取り組みも可能となる。

一 川固有のサケとは

国が進めてきたサケの人工ふ化放流事業は、サケの母川回帰の習性を巧みに利用し、大量生産に大きな成果を上げた。母川回帰とはサケが生まれ育ったふる里の川を記憶し、北太平洋での回遊生活の後、再び、間違えることなく戻ってくるという習性である。

さて、サケは同じ「サケ」という種類でありながら川ごとに違うことをご存じだろうか。石狩川の鼻曲がり、南部の鼻曲がり、ユーラップの鼻曲がりなどなどいろいろな呼び名がある。実はこれがそれぞれに違うサケなのだ。

たとえば、ユーラップ川であれば、上流の産卵場までの激しい流れを乗り越えなくてはならない。そのためには体力が必要となる。従って、この激しい流れを上り抜いた力強いものだけが産卵できることになる。これを何代にもわたり世代交代を繰り返している間に、この激しい流れを乗り切る能力を備えた、筋骨たくましいユーラップ川独特の大型のサケが生まれたというものだ。つまり、ユーラップ川の鼻曲がりとは異なるというのだ。これをユーラップ川固有の種と表現し、他の川にも同じようにその川固有の種がいるというものだ。

また、地域により川に戻ってくる経路や時期がそれぞれに異なっている。このことも違いの現れなのである。太平洋のサケと日本海のサケとは回遊経路が異なり、違う行動をとる群として区別される。また、同じ太平洋でも、河川によって川に戻ってくる時期が微妙に異なっているから、それぞれに違う群になっており、これも区別できる。こうした視点でサケを見てみると、同じサケでありながら、いろいろな違いがあることに気がつけられるだろう。こうした群はさらにいくつかの系統群に分けられている。

だから、これまで、国が進めたふ化事業は、実はこうした系統群を人工交配によって混ぜてしまおうという大きな過ちをおかしてしまったといわれている。

二 同じサケなのに習性が異なる

これまで市場価値のある早い時期に戻る早期群のサケだけをどんどん増やしてきた。また、北国においては、厳しい冬を迎える前に捕獲をしてしまおうということで、早期群をどんどん増やした。これを全国に移植し、大規模にふ化事業を展開してきたのである。その結果、早期群が各地の川に定着し、サケの人工ふ化事業は大きな成果を上げたというわけである。

例えばユーラップ川では標津川系のサケが移植されたために、標津川で9月にサケのそ上が始まるとユーラップ川にもサケが上ってくる。また、十勝川のサケも移植されているので、十勝川で10月の初めにサケがそ上を始めたニュースが伝わってくると、同じころユーラップ川にもたくさんサケが上ってくるのである。

これはユーラップ川に限ったことではなく、全国各地の川で見られる現象でもある。

つまり、移植されたサケは移植先の川を母なる川として記憶はしたけれども、戻ってくる時期については、元の川の習性が受け継がれたままだったのである。このような習性の違いが見られることから、しいていえば、同じサケでありながら、隣の川のサケとはちょっと違うといえるのだ。

三 川が蘇る

こうしてサケの習性を巧みに利用し、これまでに全国に展開されてきた人工ふ化事業であったが、ここに来て、サケの市場価格が低迷し、産業上のメリットが薄れはじめたとたんに、その捕獲の体勢を見直し、整理して、規模を縮小することになった。サケを川にのぼらせ、自然産卵をさせた方が、将来、その川に最も適したサケが残る、としてサケの捕獲を取り止める川が現れたのである。これは川固有の種を意識し、何よりも人為的に操作してきたサケの遺伝情報を是正した方が良いとの意向が働いたのかも知れないが、サケにとっても好ましい重要な方針転換となった。

また、サケの自然産卵を促すもう一つのメリットは、サケが自然産卵を始めることで、産卵ができる河川環境が注目されるようになることだ。

これまでのサケの人工ふ化事業では、そ上したサケのほとんどを河口で捕獲していた。だから、サケのふ化をまかなうだけの水さえ確保できれば、川の上流にサケが産卵できるような川の仕組みを残すことは考えなくても良かったのである。つまり、水さえあれば河川環境が壊されてもかまわなかったのである。これが河川環境の悪化を容認す

るかたちとなり、全国の河川環境が荒廃してきたと指摘される点でもある。だから、曲がりなりにも、サケの自然産卵を促す方向へ進路を変えたことは、きわめて重要な意味を持つのである。

四 自然界でのサケの役割

さて、ここで、私たちはサケの自然界での役割を考える必要があるのではないだろうか。

春、母なる川を離れ、遠く北太平洋へ旅立つころ、サケはわずかに10グラムほどである。ところが、3年から4年の後、北太平洋から戻ってきたサケは1尾の体が3キログラムにも、4キログラムにもなっている。大きく成長したサケは大きな栄養となつて戻ってきた。「栄養」すなわち動物たちの「活動エネルギー」と置き換えることができる。つまり、母なる川に大きな活動エネルギーが戻ってきた。これを生物界のエネルギー循環の一つと考えるなら、この栄養を消化し、活動エネルギーとして利用する動植物が存在することになる。

川に上ったサケをヒゲマヤキタキツネなどの獣が食べ、オオワシ・オジロワシやシマフクロウ、トビ、カラス、カワアイサなどの鳥類が食べる。また、水中ではフクドジョウやウグイなどの魚類が食べ、水生昆虫やエビやカニなどの水性生物などが食べる。次第に小さく細かく消化されたサケはやがて水に漂い、流れに乗って、海へと注がれる。今度は海のプランクトンをはじめとする様々な海の生きものたちが食べることになるのだろう。また、最近になり、川原に横たえたサケをオオワシ・オジロワシがバリバリと食いちぎり、わずかの間にバラバラにしてしまうと、そのおこぼれ

をミヤマカケス、ハクセキレイ、カワガラス、果てはマガモまでがついばんでいたという観察の報告がされた。クマゲラが木をつついたあとをアオゲラがついばみ、ライオンのおこぼれをハイエナが動物たちの餌をめぐる関わりがこんなところにも見られ、オオワシ・オジロワシの重要な役割が見えてくる。そして、川に上ったサケを一番待ちこがれているのはこのオオワシ・オジロワシたちなのではあるまいか。

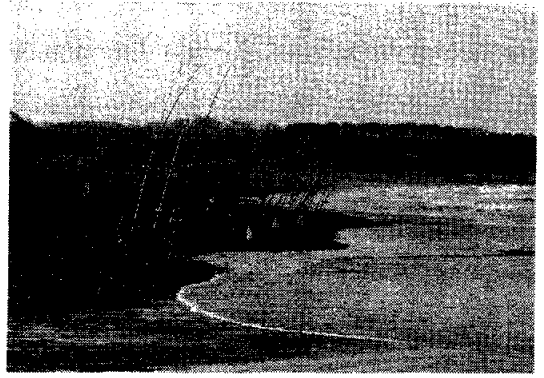
かつて、どの川にもサケが上っていたころ、多くのオオワシ・オジロワシたちが川で越冬していたに違いない。ところが、サケのふ化事業が始まると、川からサケが消え、オオワシ・オジロワシたちは餌を失った。やがて、知床半島沿岸で行われているスケソウ漁のおこぼれを見つけ、ここに集結して冬をしのぐようになった。しかし、そのスケソウ漁も不振になると、オオワシ・オジロワシは数を減らし、再び、餌を求めて知床半島を去って行ったと見られている。

また、サケが川を上り、自然産卵が見られるようになると、「もったいないから俺たちに捕らせろ。」「白くなったサケは見苦しいから片づける。」「臭いから片づける。」などの声が聞かれた。また、ふ化場関係者へも苦情が入っているらしい。

自然産卵したサケは川原に残しておいてかまわないのである。川原に横たえたサケは雪解けの増水の前にきれいに無くなり、わずかな骨になるまで消化されるのだ。これまでは雪解けの増水で流されるものだとばかり思っていたが、流域の動物たちにきれいに食べ尽くされることがわかってきたのである。



川へ入ったサケの群れ 捕獲場下



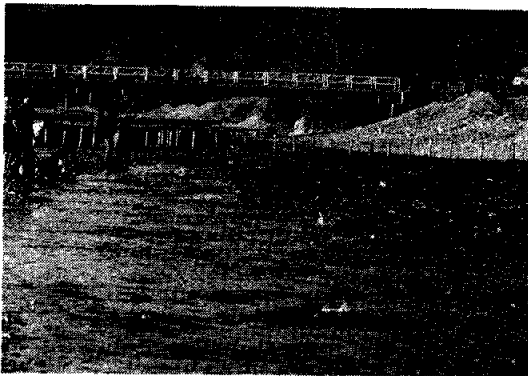
サケの一本釣り・釣りザオの林立
一人で10本20本のサオを立てる人の多い



川にのぼって来たサケをつかまえるウライ
(捕獲柵)、産卵用の捕獲場



川をのぼるサケの群れ (溯上)



サケの捕獲場



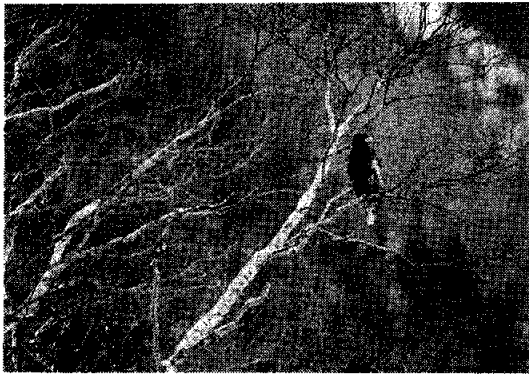
浮沈式のウライ



産卵を終えたサケは
母なる川で一生を終える



一生を終えたサケ
見ぐるしい、臭いからかたづけろという
声が上がった



越冬にきたオオワシの若鳥



越冬にきたオジロワシ



雪どけの前 サケのほとんどがオオワシ・オジロ
ワシ・トビ・カラス・カモ・ミヤマ
カケス・カワガラスなどに食われる

五 最も身近な環境教育教材

こうした折りに、一九九五年と一九九六年に道東の忠類川で、川に上ったサケを釣らせるサーモンフィッシングが大々的に報じられた。また、サケが上るようになった他の川でもサケ釣りをやらせたらどうかという動きも聞かれている。

ちょっと待って欲しい。札幌市の豊平川で始まったカムバックサーモン運動は野生の営みに触れ、自然を知ることの大切さを学んできたのではなかったのだろうか。サケの厳重な捕獲管理の中で、サケに、野生に生きる一縷の望みを取り戻そうと始まった人間の心の運動ではなかったのか。カムバックサーモン運動の原点をもう一度思い起こして欲しい。

また、川に上ったサケは絶好の環境教育の教材ともなる。ゲームフィッシングに解放された忠類川は水が澄んでおり、サケの自然産卵を観察するにはとても良い川である。しかし、釣り人が多く、サケが警戒して自然産卵を観察することができなかったという話も伝わってきている。川に上ったサケは釣りだけが利用法ではないはずである。忠類川一つを取り上げてみても、どんなにお金を積んでも得られない水族館であり、生きた博物館であり、実験室であり、しかも野生を学ぶ何ものにも代え難い環境教育の教材データバンクである。だから、サーモンフィッシングは海だけに限り、川に上ったサケを学習に解放することができないものかと思うのだ。

ともかくにも、ようやく、サケは母なる川で産卵する権利を獲得したのである。

川に上ったサケをもう一度ながめ、彼ら在必死で生きる姿に静かに耳を傾けて、彼らの言葉を一

つ一つ拾ってゆき、彼らの物語を読みとっていくことがまず必要ではないだろうか。サケが川のことを語り、川を蘇えらせる方法を教えてくれるような気がしてならないからだ。また、我々もサケと同じ野生の生きもの。自然の摂理に組み込まれた野生の生きもの一つである。きっと、サケに教えられることは多いに違いないから……。

